

## Ed.ベンだより



〒 242-0007 大和市中中央林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL https://edventure.jp/

### 私たちに選択肢がない

暑い、暑い、本当に暑い！「暑い」よりももう「熱い」といった方が感覚的にはあっている日々が続いている。皆様も熱中症には注意されていると思うが、是非警戒を。

少し前までの学校で子どもたちに「好きな季節」を聞くと、「夏が大好き」という子どもは多くいた。理由としては、「夏休みがあるから」「プールや海で泳げるから」「親戚の家に遊びに行けるから」など素直な答えが返ってきた。しかし今はどうなのだろう。これだけ暑いと外へ出るのも躊躇するし、エアコンのきいた家でゲームというのが現在の夏の過ごし方かもしれない。なにせ、プールに行っても、

プールサイドで熱中症の危険ありなのだから、いたし方ない。夏の陽射しの下で友達と思いっきり遊ぶ夏休みは、もう昔ばなしなのかもしれない。「夏は元気に、真っ黒になるまで遊ぼう」とは言えない。「強い陽射しに注意」が現実だ。しかも、日本中いたるところでこの状況なのだから逃げようがない。日本の自然（地球の自然）は、こうも変わってしまったのだろうか。

話は変わるが、皆さんはまだ「富岡町」のことを覚えているだろうか。福島県の富岡町である。東日本大震災の福島第一原発の事故で、全町民の避難が行われた町である。それぞれの家族が親戚などを訪ねて避難する中、富岡町にあった二つの小学校と一つの中学校は、三春町にあった曙ブレーキという会社の施設に移り、近辺に避難している子どもたちを集めて、細々と教育活動を続けた。当時、私たち Ed.ベンチャーも震災支援に取り組み、岩手県の陸前高田市や宮城県石巻市の子どもたちへの避難所における学習支援を継続的におこなっていた。その折、曙ブレーキで学校が再開されると聞いて、保健室のベッドなどの提供をおこなったことがある。

この富岡町の現在の町長さんと、7月中旬、お会いする機会があった。実は昨年にもお会いしており、2度目の機会であった。町の様子を聞くと、「町民はわずかずつ増えてはいるが、それは避難した町民が戻ってきているということよりも、新しい人が入ってきている状況。原発事故から何年もたったけれど、地域自体は失われてしまったのかもしれない」とお話しされた。町の総人口は現在 11,000 人ほどだが、町に実際に住んでいる人は 2,400 人ほど。現在住んでいる人の半分以上は震災後の移住者とのこと。特措法があるので、住民票が富岡町にあっても、多くの町民が他の都道府県に現在は住んでいる、とのことだった。「避難した先で仕事を持って生活しちゃうと、なかなか戻れないですよ。」しかし、特措法が切れると今のようなわけにはいかなくなるそうである。こうした状況をお話しされたあと、町長さんは続けて、「それでも、子どもたちには楽しい経験をたくさんさせてあげたい。」と熱い口調で語られていた。二つあった小学校は令和4年に富岡小学校として統合され、同じ施設内に中学校もおかれた。現在の児童生徒数をネットで調べると、小学校児童数46人、中学校生徒数21人である。

こんなお話をお聞きした10日後、新聞には「原発建設費 料金上乗せ検討 新電力契約者も負担の可能性」という見出しが一面に踊った（7月24日朝日新聞朝刊 以下の記事も）。記事の出だしはこうだ。「経済産業省が原発の新增設を進めるため、建設費を電気料金に上乗せできるようにする制度の導入を検討していることがわかった。原発事故で安全対策費が膨らむうえ、電力自由化で建設費を確実に回収する手段もなくなり、電力各社が投資に及び腰になっているからだ。」この制度では、再生可能エネルギー 100%を選んだ人も、原発の建設費を支払う可能性がある」と、記事では指摘している。本当にこんなことが許されるのだろうか。

その三日後の7月27日には、敦賀2号機が「不適合になった」ことが報道された。（以下は東京新聞朝刊）「日本原子力発電（原電）が再稼働を目指す敦賀原発2号機を巡り、原子力規制委員会の審査チームは26日の会合で、原子炉建屋直下に活断層が通る可能性があるとして、原発の新規性基準に適合しないと判断した。」

なんと、活断層の上に原発。それでもお金が足りないということで、電気を使うすべての人から資金を集めようとしている。

ご存じのように、私たち「NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー」は、行動宣言のなかで、「原子力発電への反対を表明し続けます」と掲げている。この表明は、東電福島第一原発

### 熱中症対策・応急処置



の事故を受けてであり、曙ブレーキに、地球儀や保健室のベッドを届けたことと無関係ではない。それなのに、電気料金に原発の建設費が上乘せされたら、私たちは原発を支える側になってしまう。反対の選択肢は残されなくなってしまう。

自然環境や原発だけでなく、こうした選択肢のない世界が私たちをいたるところで締め上げている時代になった。

例えばマイナンバーカードと保険証。マイナンバーカードで誰が得するのかはよくわからないけれど、その普及率は2月段階で73.3%。まだ4分の1の人は作成していない。なのに、12月にはすべての健康保険証をマイナンバーカードと一体化すると「宣言」している。マイナンバーカードを作成していない4分の1の人の中には、地方に住む多くの高齢者もいることだろう。その高齢者の方々が健康保険証を利用しないとは考えにくい。個々の考え方や事情は全くお構いなしで、物事が進んでいく。このおかしさ。医療従事者や病院から反対の声が上がっても無視された。個人病院の中には、マイナンバーに対応する機械を入れることができなくて、閉院を余儀なくされたところがあると報道されていた。紙の保険証での不具合が社会問題になったことはこれまでにはない。それでも選択肢のない世界。

大都市への一極集中はどうだろう。大都市が華やかで豊かだから人が集まるのだろうか。いや、そのように見えるように飾られてはいるが、実際は地方に就職口がないからという理由が一番多い。働き口を求めて人は都市部に集まる。そこで生活が始まると、「なかなか戻れないですよ」。富岡の町長さんが話されたとおりである。都市部へ出てくる若者は、女性の比率が高いという。それだけ女性の仕事が地方にはないのだ。

女性のおかれている立場については、ここで詳しく語るスペースがないのだが、高度経済成長後の女性は、男性の賃金を下げるための、より安い労働力として使われてきた。「夫だけの賃金では足りないので、家事をやりながら安いけどパートに出る。」ことが当たり前になった。しかも、税金の壁を作って、収入の上限を作りながら、安い労働力として雇用してきたのだ。ここにも選択肢はない。

女性と重なるのが外国人労働者である。労働人口が減りつつある日本では、これから外国人労働者に頼らざるを得ないことはわかるが、現在のシステムでは、外国人労働者を高級労働者と、肉体的労働者とに分け、肉体的労働者には様々な制約を課している。結婚や出産の自由さえないのだ。日本の下の階層に位置づけようとする意図が見え見えではないか。これで本当に「共に生きる」社会をつくることができるのだろうか。

羅列的に述べてきたが、この「選択肢がない社会」はその一つ一つがとても重い問題であり、その一つ一つが私たちを締め上げていることも事実だ。貧富の差がますます広がるとともに、私たちはますます生きづらくなっている。私たちの力では、なかなか解決の道筋が描けないところまで来ているのだ。次代を担う子どもたちに、バトンを渡すしかないのかもしれない。

しかしもし、こうした現実社会の問題を子どもたちに赤裸々に伝えたら、子どもたちは未来に夢を描けるのだろうか。この選択肢のない社会を子どもたちもやがては受け入れることになってしまうのだろうか。または、こうした様々な問題を解決へと導いてくれるのだろうか。

だが、こうした重要な問題が、学校で語られることはほとんどない。なぜなら、こうした問題を「語る」という選択肢が、今の学校教育にはないからだ。

将来子どもたちが出会うであろう問題を、かれらの時代には是非解決していったほしい問題を、未来をつくる主人公である子どもたちに、なぜ今の学校では語れないのだろうか。その理由を、是非教育に携わる一人一人が考えなければならない時が来ているのかもしれないと思うのだ。



## これからのEd.ベンチャーの学習会

### ●2025年度 教育講演会検討会@大和市シリウス

8月19日(月) 19:30~21:00

2025年度に向けて、取り組むべき教育課題を検討する会を開催します。

### ●理論学習会@大和市シリウス

学習会 8月24日(土) 13:30~15:30 人との関わりの中で学び合う学校から学ぶ①

### ●授業研究会@大和市シリウス

学習会 8月24日(土) 16:00~18:00 インクルーシブな空間としての教室の創造

### ●インクルーシブな社会を目指す学習会@大和市シリウス

事例研究会 10月10日(木) 19:30~21:00 中学校におけるインクルーシブの実践

◆理事のひとこと◆ 中学校を卒業して23年が経った30代後半となる卒業生たちの同窓会に参加した。やんちゃな子、不登校気味だった子、いろいろなことを抱えていた子どもたちが、ちゃんと社会の中で生活し、同窓会に集まってきていた。そんなかれらを見て感動した。そして学校の存在意義について考えた。学力向上が目的となっている今の学校は子どもの居場所になっているのだろうか。子どもたちを結びつける機能があるのだろうか。(SH)